

落
汁

「落汁」といふ題は編者がつけたものである。

秋田での俳句は此のほかにもあるが、それ等は「孤囚漫筆」及び書簡集「秋川から」に載せて置いたから、重複を避けてこゝには省いた。

— 編 者 —

大正十五年五月

さみだれ(二句)

煉瓦塀にきゆくつな草のさみだるゝ
燕よりも雀よりも鳩のさみだるゝ

六
月

眠むき眼覺に

曇る庭の三味草花は起きたやら
雨暗き房に香のない落の汁
句一念落汁の香のほのかなる

朝涼(五句)

夢もなく自づと覺めて雲涼し
朝の雲涼し散り来る蚊は青く
焼けながら雲濡れてあり朝の月
蓮の葉の露のよに涼し今朝の月
雲涼し戀ふれば蓮の匂ひきて

中央の作り芝生に、茨の花と燕子花との咲きあ
たり。茨は紅白、燕子は紫白、共に前夜の雨を
湛へて、松下に微風をばらみつ。(二句)

茨の花に芝生に湛ゆ夕べの雨
燕子花我が編笠は艶ならず

蚤(二句)

蚤光る床のすき間や日の匂ひ
蚤の國蠻女いささか黄なりけり

七
月

ガラス筆洗ふや淡き夏の夜の
巢の蜘蛛よ我が吊る蚊帳を何んと見る
蚊帳吊つて四圍の壁見ぬやする哉

八
月

炎天や蜂かもついと閃めきし
糸屑に埋れて赤い團扇哉
雲の峯せめて龍飛の浪響け

曉雲送涼風 電線迎燕子

燕の子とべく風が尻を吹く
天の海の浮島雲や渡り鳥
やれ踏んだ團扇よ秋の骨の香

九
月

歸燕子を見送り顔や屋根の鳩
燕去りし朝や雀のものがたり
お、野分! 野分!! 悲壯なるマーチよ……

鴉 潜み 鳶 聞へる 野分 哉
鬼城 赤く 蟠り けり 秋の 空

偶感

秋澄めり我れ白眼のなほ失せて
鳩ゆるく飛んで秋澄む羽音かな
秋の風會々庭を驅けみるや
體操の汗拭いて蟲に獨り寝る
秋風や飯をはごせば麥の蟲
雲越しに白光させり秋蛙
秋風に濡れて來る蚊の泥黒な
生水を薬餌となしつ蟲の秋
秋の蝶とひそやかに歩む晝の月
朝寒むや湯桶にひたと止る蠅

十月

混々と湧く水想ふ夜長かな

秋晴嬉心

赤蜻蛉さぞ細網をすく人も
自棄聲でぶんと一飛び秋の蠅
粉になつて秋が散るく赤蜻蛉
老いて眠い煉瓦塀かや赤蜻蛉
身に沁むや旭に透く鳶の破れ翼
今朝なきし蛙や何處に爰るらむ

葉牡丹に焦茶雀の多となり
支那南瓜まつ黄な汁も小春にて

卽景

蒼穹へ菊をさゝげて笑める僧
菜畑の爰る彼方は病舎かな
鳩三羽病舎の屋根に爰れけり

十一月

病まじとて踏むや地肌の風光り
眼鏡つめたき霞の後の空あをみ
こよなき不孝の、今日は老ひ給へる母が姿を思ひ浮べつ。

手の皺の炭の粉塞う在すらん
冬蒨の草を観てまた機に上る
機織れば指に小春の色が染む
古さうな囚人を日ざす枯芝と
木枯や水汲むでくる下駄の音
簪笛を吹き習ふらし霜の朝
冬の甃止んで訝え飛ぶ鴉かな
心水のゆらぎてやまぬ寒さ哉
指の爪職歪みして日短かき
衿垢の光りも寒し冬の雁

十二月

吹雪く日や覗き窓から教誨師
命ちの窓で闇がさゝやく散る雪が
うまいせん雪降る暗に包まれて
ともし火の清淨を見つむ耳に雪
雪晴れて夜の青さに驚けり
ふと鳴いた懷中の湯たんぽも淋し
教誨堂

我れ獨り離れて坐る寒さかな

十一ヶ月廿四日間の大正十五年、續いて七日間
の昭和元年の、今將に終らんとし雨しきり也
屋根の雪の暮き落ちつ行く年や

昭和二年一月

屋根に迷ひ猫啼く、日影薄し

壁住みの鈍い男や冬日影

獨り居の窓にて冬の雲深し

風邪引きて熱あり

風邪の眼やぬくい泪に灯の映えて
囚人と看守の縁や雪荒るゝ

寒水多功德 床亦靈妙也

二月

寒水や頭に泌みる飲みこゝを

雪荒るゝ聲の向ふは世間哉
ふところの湯たんぽが冬の風が泣く
マコちゃん!! キミちゃん!!

冬の風空耳もがなと思ひけり
冬の孤獨の耳底に澄むは何
彼方の房に「ぶた」となん呼ばるゝ暴れ男住み
けり

勘ねたりな着物の綿も隔つこへ
月の色、や、黄色く霞み初めぬ。野良猫の鳴く
音きこゆ。地は雪を敷けど、何處やらに春の色
匂へり。

月はやゝ離になりぬ猫の息
雪かけて炭火を消せば啼く鴉
家裏は淋しきものを冬の川
樹に風や囚車は雪を迂り行く
白雪、霏々粉々。中々に寒し。

啞々と啼く聲は中空雪の中
水鼻や凍傷や啞々と啼く鴉
病臥(三句)
うつらうつら臉に近き春の雲

三月

春雪や刺り傷の血の美しき
我が窓は春告鳥も休にて
や、體熱あり、春の月朧々として頭重く、狂想
しきりに湧きぬ

離夜の奇しき病や蝶の露
哀れ吾が手指の凍傷の跡、御笑ひ候へや、春の
女神

春の日にかざせし指の腫くさよ
残る雪尻目に蚤をとり得たり
東風吹くや樟眼匂ふ墨の汁
汚れ足袋草萌ゆ印に憐みぬ

四月

凍傷の古皮めくる暖かさ
自讃

暖かに鼻から外へ出た毛哉
床板の年輪数うる日永哉
春雨に濡れたる砂利の千色哉
下崩やゆつたり土を踏むこゝろ
落ちて見たし涼から春空へ

蚕の子に長閑な面を蹴られけり
庭の畑打つ音聞ゆ（二句）

淋しさうに打たる、畑打てる人
畑打つ音にも君が淋しきは
遅き日を蕪村のホ句に酔ふてあり
灯つたに雀も寝たよ畑打ちよ
日の色や草履に匂ふ春の苔
金牛和尚
飯桶を抱えて舞ふや春の風
大梅禪師

御顔も霞の色や松の花
鳩やぬる、寢覺の雨の春を聴く
若草や珊瑚のやうな鳩の足
僧問大龍、色身敗壞、如何是堅固法身。龍曰、
山花開似錦、泗水湛如藍。

春空やたゞ無量光無礙慈光
窓日影やすし日永の第二年
春宵や濃きよりたる、星の糸
轉りや膳の茹で菜も花のまゝ
鳩も皆出拂ひにけりな晝霞
日永くなれり、學房子の早仕舞ひて歸りくる頃
は猶明るし

嘲りや學房囚の夕機嫌
暖かや小鳥に糞をかけられて

五月

天人よ暮春の鳥の鳴く時は
編笠を三味線草に預けけり
行く春のべんべん草を鳴らさばや
雲よ離れつゝちは枯れて花三つ
昨夜大雨、初雷を聴く

初雷や暗れて燕の赤い頬
行く春や囚衣は赤く夜着青く
けちくと二人で聴くや五月雨
五月雨や此の綿入で七ヶ月
露汁やあたり病臥す人多き
露汁やお膳のそばの薬瓶

六月

梅雨曇る空やしきりに鵲の聲
機馴れぬ足の痛さよ梅雨の鵲
さつき晴、蜻蛉出づ。

紫に煙たちのぼる薄暑かな
夜の梅雨や布團へ投げるむくみ足
玻璃窓や外の雨粒なかの鰯
入浴に行く。浴場の横の廣場に作られた菰草が

清々と伸び立つて来た

さみだれや作り放しの笹草

入浴からいゝ氣持になつて歸つて来ると、丁度
雨も晴れた。やがて夕飯で、冷奴。

冷奴水繪の空となりにけり

寝起きの眠むたさに

睡り魔の逃げまどふらし夏の顔

朝焼の高晋や鶴も郭公も

犬蓼の狂ひ咲きありさつき晴

短夜や夢ちぎれ雲ちぎれ雲

六月や我は愛する朝の雲

蚤の痕涼しく撫づる朝の雲

夜も更けぬ書上を飛びし蚤の音

七月

燕の子教誨の座に飛入りぬ

親や遠き雲を眺むる燕の子

明易き頃を雀の寝言哉

暑き日や眺むるものに臍の垢

蟬なくや残飯桶を運びゆく

汗たるゝ男盛りの臭ひかな

山見たし窓に羽蟻の飛べる日は

行水の戀しき屋根の鵲鴒に

九

月

朝風や茄子の花落つ濡れ畑

炎暑寂々

日の盛り閑に笑を囁む馬もがな

去年の蚊の枯ぶも暑し本のあひ

鶴鶴の高音に暮るゝ白雨哉

ホ旬の味胡瓜の味の嬉しさよ

蟬鳴くやおハツの鹽茶紅團扇

蝙蝠やしきりに隠くる利鎌月

金泥の三ヶ月にぶし蚊喰鳥

雲の暮引いてしまひぬ戀の星

誰れやらが嗚呼ともしらぬ遠花火

秋 早 褐 色 の 蝶 舞 上 る

親しさや蚊帳に来て鳴く秋の蟲

向きくゝに茄子の天窓や渡り鳥

秋の蟬尻から蟻につゝかるゝ

秋の蟬鳴きなむとして止みぬらし

初嵐大きな蘆に驚きぬ

秋涼し西の窓より朝日影

けふ歸る燕もあらむ晝花火

秋晴や雲に映れる雲の影

去ぬ燕春また來るはどの子かな

十

月

雨に鳴く蟲や花火の夜は明けて

秋雨や花咲く素枯る笹草

狐茸よべの無月に生れけり

秋風に唐金のよな蛙かな

薬ごみは蟻にてありしよ秋の風

明け方、小便に起きて、思ひがけなく雲間の玉
兔を見る。

月見れど悲しくもなき淋しさよ
様々の鳥鳴き渡る夜長かな
よくきけば房の内にも蟲の鳴く

悼芥川君

地り下で蟲の鳴く音をきかるゝか
獄底やおどろ秋蟬干し埋む
夕焼やあんな高さを飛ぶ蜻蛉
石ころも疲れ色なり赤蜻蛉
砂利の下を我世ぞと思ふ晝の蟲

理髮夫君に

剃刀を芋の葉露にすゝがばや

夜長さや晝をあざむく白い雲
庇から垂るゝ巢薬やとんぼ晴
想はずてあれば眠むたし赤蜻蛉

地を踏めば地に響きあり渡り鳥
驚飛んで夜長の闇を眩きぬ
蜻蛉や庭這ふ草も莖赤に

初 霰 (二句)

窓に入る霰を拾ひ甜めてみし
見て居るや霰消えゆく掌
晝の月へ舞上りけり秋の蝶
亂れ雁嬉々哀々と渡りけり
淋しさを知るや雁金の睦まじや
末枯や茄子は花を執しつゝ
草の實や雀にもこんな矢り顔
この心雁十文字に渡るなる
想ふ事も遙かなる身に雁遠し
過ぎけるは紙片か蝶か秋の聲
そぞろ寒む雀と頬を觸れたけれ
編笠を脱いで蜻蛉に與へけり
秋はもうほんのかげろふ蜻蛉哉
來ぬ管の手紙またるゝ秋の暮
箒草は箒となりぬ風の音

十 一 月

もろともに雀も散るや木の葉風
時雨けむ木の葉もまじる漬菜哉

多に入る星の息吹やかすれ雲
手を擦ればかさく落葉かさくく
あの蜻蛉こよひや果てむほろしぐれ

鳶去りし冬空のぞく竜かな
木枯や夜雀襲ふ屋根の猫
綿入や骨に泌みくる日のぬくみ
鳩殿に雀よりそふ寒さかな
しぐるゝや膳に引き添ふ手桶の湯
冬の蠅いと戯かに在しけり
棚に置く塵紙二枚冬の蠅
木枯となりゆく迷ひ鴉哉
木枯や突き傷の血の溢れくる
汚れ雲曇れて暮れてしまひけり
からだ中に日を浴びてゐる冬木哉
静けさを日影の泌みる冬木哉
冬鴉天邊の聲は聴くに堪ゆ
寒むき耳ほれば砂撒く響あり

十 二 月

霜の松の尖端が見ゆる煉瓦堀
霜の菜のくつきりと晴れて習字哉
墨の香を離れてしばし冬草に
日の下に土黒く霜の青菜濃く

牙ゆる夜や銀河の如き雲満る
かなまどの下の石ころと枯躰獨
踏む土のそこゝの小さき冬萌や
冬雲の穴より見ゆや日照り雲
油滴らす朱肉に牙ゆる灯影哉
磨る墨のしきりに牙ゆる氷雨哉
粉な雪の止みなむとして隅青し
湯たんぼ、凍傷膏を給せらる

三分の凍傷膏やかんな屑
ぬくみある湯姿に頬を觸るゝ哉
吹き來り吹き去る風に掃く煤や

課題獨吟を試む

冬木（五句）

高い股に青草見ゆる冬木哉
雀壺桑よりも桃の多枝に
見るかぎり冬の榴桑や土塊や
野のおちこち牧柵をなす冬木哉
この家の人がたくなや冬榴木

課題 火事（七句）

火事多し夜風に飛べる鉋屑
遠火事やほのかに見ゆる老古木
火事跡や心と和らぐ池の鳥
お宮火事鴉の埒照しけり

火事の煤掃いて水仙活けにけり
啼く千鳥あれゝ沖に船火事が
舞ふ雪や火事を逃げくる廓女

辭世

もろもろの惱みも消ゆる雪の風

久太句屑

これは、僕の古くからの句を思ひ出して書き止めたものののだが、
馬鹿に少ない。もう少し氣の利いた句もあつたと思ふのだが、どうも思
ひ出せない。然し、思ひ出せないほどのものならどうせ拵えものゝ歌
句のみだつたに違ひなく、深い實感から流れ出して作つた句は殆んど
なかつたからなのだらうと思はれ、淋しい苦笑が湧いて來る。

春

明治四十二年頃

春淺き揚げ藻に光るもろこかな

大正元年頃

一坐あちらこちらの温む水に向く

教盛塚（大正二年頃）

しやくなげの花薄暗く拜みけり

大正五年頃
馬は暖かに尿す銀座の柳かな

夏

明治卅八年頃

初蟬や草の匂ひに木の匂ひ

明治四十一年頃

人食ひを聞ひて散る子や蚊食鳥

みみず湧けば南瓜肥ゆると蚊遣かな

明治四十四年頃

柴陽花に雨が降るなり光琳忌

大正五年頃

金魚掘み殺したる性慾の惱み

浴衣纏せて日中を夢のよな男

大正十年頃

蟬なくや旅は琉球の脂味噌

秋

明治四十一年頃

ぐみ荒れの舌の痛さよ鵲の聲

明治四十一年頃

磯臭さな蟹が裾這ふ秋の蛸

明治四十三年頃

隠れ住む手折れ角力や鵲の聲

大正元年頃

松の葉の苦がきを噛みつ鵲の晴

人を送る花火の煙り雲と飛ぶ

大正二年頃

その荒壁の主じ鶏頭節くれて

冬

明治三十九年頃

恐ろしき浪の音きく炬燵かな

大正元年頃

櫓の灰ねむたし枇杷の花に鳥

望石に文字ありと避寒人の見て

冬の夜の白足袋白う参じけり

獄中吟——大正七八年

床板に寒光すものやこぼれ鹽

冬旦の天深か深かと泳ぐ鳥

雜

大正五年頃

俺が脂も浸めよと銅貨握りたる

煙管のやにの流るるがままに老ひしなれ

筆の軸を噛み割る我的癖は悲し